

チートスキル「暴食」で最強&飯テロセカンドライフを満喫します！

異世界ほちやり無双

空戯ケイ

illustration Nyansan

vol. 3



Chubby Hero's
Reign in Another
World

ダルガス

ビーストアックス
悪徳ギルド(獅獣の剛拳)の
ギルドマスター。
とある事情でコロネを
狙っている。

レイラ

いつも冷静沈着な
クールビューティ。
剣と魔法を同時に操る
魔法剣士。

デリック

陽気で明るい、
ムードメーカー。
剣を武器に戦う
肉体派。

オリビア

異世界の街、ベルオウンの
領主の娘。父親をコロネに
助けられてから、
彼女を慕っている。

わいちゃん

コロネの従魔の
もふもふドラゴン。
関西弁が
チャームポイント。

ナターリヤ

弓を武器に戦うエルフの少女。
魔素の流れを視ることが出来る。
穏やかな性格だが、
ちょっぴり気弱な一面も。

コロネ

異世界に転移したぽっちゃり女子。
カロリーを魔力に変えるスキル
『暴食の魔王』で、
絶品グルメを満喫しつつ、
異世界を冒険していく。
でも魔法を使いすぎると痩せて
しまうようで……。

◆ 主な登場人物 ◆

プロローグ 動き出す、悪徳ギルマス

——とある日の夜。

男は高級感のある執務机を、バァン！ と叩きつける。

「——この愚図がつ！ 貴様は何度俺をイラつかせたら気が済むのだつ!!」

怒声を轟かせるのは、冒険者ギルド〈獅獣の剛斧〉のギルドマスター——ダルガス。

隠す素振りもない憤怒と殺意の怒号を真正面から浴びるのは、ボロボロの黒衣をまとう瘦身の男。ダルガスと契約を果たしている、『悪魔』デモールだ。

デモールはダルガスが怒りのままに投げた飾り物の水晶をひょいっと躲して、埃を払うように軽く自らの衣服をはたいた。

ガシャァン!! と水晶の破碎音が豪華な室内に響く。

「仕方ないじゃないか。僕だって捕らえるために色々な策を講じたんだよ。だけど、彼女——『コロネ』の方が一枚上手だった。まさか一介の冒険者が聖属性魔法を使ってくるなんて予想できないだろう？ それも僕の『分身体』を灰に帰すほどの強力な攻撃だ。おかげでかなりの魔力が削られてしまったよ。しばらく休養が必要なほどにね」

不健康な白い顔を笑みに歪めたデモールが、黒い翼を畳んで手を広げる。

デモールが言っているのは、先日王都で起きた出来事についてだ。

異世界からやってきた少女、コロネを狙いデモールは彼女と戦ったのだが、最終的には彼女の聖属性魔法によって敗北を喫した。

悪びれる素振りもない飄々とした態度に、ダルガスの怒りが激しく燃え上がる。

「黙れ！ くだらん言い訳など聞きたくはない！ それに休養が必要だと？ 任務を失敗した、クスの無能でしかない貴様が休みを要求するなど認められるか！」

「くくく……まあそう熱くならないでくれよ。たしかにコロネは想定以上の逸材だったけど、多数の一般市民に被害が出ても良かったなら他にも手立てはあったんだから。でも、キミは王都が破壊されることは望んじやないんだらう？」

「……貴様あ、よもや今回の失態を俺のせいにする気じゃないだらうな」

「僕はただ、事実を言っているまでさ」

デモールの含み笑いがダルガスの激怒を煽る。

その煮えたぎるような怒りを密かに味わい楽しんでるデモールの真意に気付かず、ダルガスは奥歯が割れんばかりに歯軋りをした。

そして執務机を周り、対面のダルガスに歩み寄る。

「アルバートにかけた呪いも治癒され、コロネとかいう例のデブ女も捕らえられず、あまつさえ貴様は分身体が葬られたことで力の大部分を失った。この落とし前、どうつけるつもりだ？」

以前よりデモールとダルガスは活動拠点であるベルオウンの街を手中に収めるべく動いていた。

そのためにベルオウンの領主であるアルバートに呪いをかけたのだが、それもコロネの活躍によってすでに解かれている。

「実際にコロネと戦ってみた僕の率直な感想を言うなら、彼女とは正面からぶつからない方がいい。捕縛も諦めるべきだろうね。排除するなら『暗殺』一択だ。寝込みを襲うか、街中で闇討ちするのが一番成功率が高いんじゃないかな」

「……もういい、黙れ」

ダルガスは恐ろしく低い声で言った。

デモールは肩を竦め、フツと笑う。

「ちなみに、住民に被害が出ることを受け入れるなら、かなり有効策は増えるんだけど、どうする？」

「黙れと言っているだらうっ!!」

「おっと」

ダルガスは筋肉が大きく隆起した腕を横薙ぎに振るう。

グオン！ と風を切って迫る筋肉質な腕をデモールは身軽な動きで回避した。

その力強い豪腕を振るっただけで空気が押し出され、室内の机や調度品が揺れ、無数のヒビが入る。

ダルガスは滾る憎悪を努めて抑え、片手で顔を覆った。

「……住民に被害が出るのは避けるべきだ。少なくともまだ早い。コロネとて、こちらに抱き込め

るならそれがベストなのだ。奴を俺の手駒てこまに加えられるれば、もはやこの街は支配したも同然……！」
だが、とダルガスは区切つて。

「俺の言葉に従わぬ場合は消すしかない。その時に備え、『闘技場』しゅうぎじょうにいくつか〃仕込んで〃おけ。俺の合図で発動させる。無能なクソ悪魔でも、それくらいならできるだろう」

デモールは、ダルガスの変化を目敏めびんく察知した。
笑みを隠し、慙いん無礼ぶれいに頭を下げる。

「了解しました、ご主人様。でも、どうするつもりだい？ 今の口ぶりだとまずは平和的に懐柔かいじゆうしようとしているようだけど、コロネに対して何か妙案でも思いついたのかな？ 安いエサだとかえって逆効果になりかねないよ？」

ダルガスは盛大なため息で応えた。

「……思えば、最初はなから貴様のようなクソ悪魔に任せたのが間違いだつたのだ。懐柔するにしても、潰すにしても、遠回りな手法に固執こじしつする必要はなかった。俺自身が大胆に動き過ぎればアルバートの邪魔立てが入るかもしれぬとどこか遠慮があつたが、もはやそんなことを気にしている局面ではない」

「ほう、それはつまり？」

ダルガスは壁に堂々と飾られた巨大な斧おのの前に立つた。

眉間まげんに皺しわを刻み、青筋あおすじを立てながら断言する。

「もう面倒な探り合いは不要だ。こうなればこの俺が直々に、コロネという目障りな障害を蹴散けちら

してくれるわっ!!」

怒り狂う獅子ししのような獯猛しゆもうな眼光で、豪斧ごうふを握つた。

圧縮された覇気が室内を圧迫する。

「くくく……それは楽しみだ」

ダルガスの憤怒に満ちた覇気を感じ、デモールは気付かれないように笑みを深めた。

第一章 冒険者ライフを送っちゃう、ぽっちゃり

「——いつけええええ、わいちゃん！ 炎のプレスで一掃いっそうだあああああーっ!!」

「お任せあれやでご主人ーっ!!」

見晴らしのいい草原の奥。

《魔の大森林》まのだいしんりんにいる無数のゴブリンたちが炎に包まれる。

「ギギヤアアアアッ!!」

「グギイアアア!!」

「ギヤギヤアアアアアッ!!」

ゴブリンたちの断末魔だんまつまの叫びも、ごうごうと燃え盛る炎の音にかき消されていく。

人ひとりどころか、家一棟いっとうくらい余裕で全焼ぜんしょうさせられそうなくらいに広がる赤い火炎は、一体の

ドラゴンの口から放たれていた。

文字通り焼け野原と化した目の前の光景に、ぼっちゃり女冒険者ことわたし——コロネはガッツポーズをした。

そして、我が最強の従魔じゆうまに駆け寄った。

「あつという間にゴブリンの群れを倒したね！ さつすが最強ドラゴンのマイ従魔っ!!」

「ふふーん！ ま、わいのプレスにかかれば、これくらい朝飯前や！」

見上げるほどに巨大な、青白い毛皮のドラゴンは得意気に吠ほえると、しゅううううう、と縮んでいく。

一瞬にして、小動物サイズにまでちっちゃくなつたもふもふドラゴン——わいちゃんはコテコテの関西弁とともに胸を張る。

「わいちゃんと出会ってなんだかんたもう一ヶ月くらいだね。最初はベルオウンの住民たちにも驚かれてたけど、今はもう慣れたかな」

一月前ひといきまえにひよんなことから訪れることになった王都で、わいちゃんと遭遇した。

その後、紆余曲折うよきくせうあつてわたしの従魔になり、今はわたしたちと一緒にベルオウンで楽しく魔物を狩っている。

「にしても、巨大化した時と小型化した時のギャップにはいまだに慣れないなあ。さつきまであんなに凜々りんりしいドラゴンだったのに、今はこんなにもふかわドラゴンに変貌へんぼうするなんて」

「ご主人、くすぐつたいでえ〜！」

わたしはしゃがんで、草原に立つわいちゃんのもふもふボディを笑顔でもふる。

このふわふわの毛皮をもふって撫でてみると、自然と顔も綻ほろんじやうね〜！

ひとしきり気持ち良さそうに撫でられていたわいちゃんが、ハッと顔を上げる。

「せや！ ご、ご主人！ ゴ布林も倒したことやしい〜、そのお〜……」

「あー、はいはい。分かっているよ。ご褒美の『アレ』だよね？」

わたしはニヤリと笑い、わいちゃんの目の前に両手を広げる。

そして、全身の魔力を消費し、手のひらに集めた。

「——『お菓子召喚』、発動っ！」

わたしの両手がパアアアッと光ると、何もなかったわたしの手の上に二つの白いお皿と美味しそうなケーキが出現した。イチゴのショートケーキと、シックな色合いのチョコレートケーキである。

「ふおおおおお！ これやこれやああああ!!」

わいちゃんは目の色を変えてぴよんぴよんと飛び跳ねる。

わたしはカロリーを魔力に変換する『暴食の魔王サタン・カロリー』を始め、いくつかのスキルを持っている。

そしてこれがその一つ、『お菓子召喚』！

その能力は魔力を消費することでイメージしたスイーツを召喚することができるという、ぼっちゃりには嬉しすぎるチートスキルだ！

このスキルのおかげで王都では双子のパティシエたちを救い、わいちゃんも懐柔……じゃなくて、わたしの従魔になることを前向きに検討してくれる要因となった。

動していた。というのも――

「わたしたちが受けたクエスト、『ゴブリン百体の討伐』。これで完了かな？」

わたしはアイテムボックスを發動し、一枚の羊皮紙ようひしを手元に出現させた。

それは冒険者ギルドから受けたクエスト用紙で、表題は『ゴブリン百体の討伐』となっている。

「最近、こういう魔物の大量討伐系のクエストが増えてきてるよね。ゴブリンを筆頭に、『魔の大森林』で魔物の異常繁殖が見られてるんだっけ」

今は魔物の繁殖期はんじくきのようだけど、例年はここまで魔物の数は確認されなかったらしい。想定を上回る増殖数のようだ。

このままでは『魔の大森林』から魔物があふれて街に被害が出かねないとのことで、個体数削減を銘打って大量の魔物狩りの依頼依頼が出ているという経緯である。

「でも、ナターリヤたち冒険者にとつたら美味しい状況なのかもしれないね。ベルオウンでたくさん魔物討伐のクエストが出るから、みんなやる気になってるし！」

ナターリヤちゃんの視線の先には、『魔の大森林』に向かつていく冒険者パーティの姿がいくつも見える。七割くらいは戦士系の前衛職で、絵に描いたような荒くれ者たちが武器を片手に『魔の大森林』に向かつていく。

ナターリヤちゃんの言う通り、今は冒険者にとって絶好の稼ぎ時だからみんな鼻息を荒くしている。

「とはいえ、わたしの懐は潤うるってるからそこまで魅力は感じないんだけど」

先日、王都で起こった二つの事件。

悪魔デモールの討伐と、もふもふドラゴンたるわいちゃんの無力化。

その一連の騒動を解決した褒賞金として、王宮から白金貨はっきんか十枚が進呈しんていされたのだ。

一枚あたり百万円の価値がある白金貨を十枚、つまり単純計算で一千万円ほどの大金が舞い込んだ形になる。

特に使い道もないので今もわたしのアイテムボックスに眠っている。それでもわたしがクエストに励んでいる理由は、パーティメンバーとの交流と軽いエクササイズがてらつてとこである。

ナターリヤちゃんが、こてんと首を傾げた。

「どうする、コロネお姉ちゃん？ クエストが終わったなら、一旦街に戻る？」

「そうだね。ちょうどお昼くらいだし、ご飯でも食べにベルオウンに戻ろうか」

そうして、ベルオウンの街の方角に視線を移した瞬間、手を振って小走りやってくる冒険者たちと目が合った。

「あつ、いたいた！ おーい、コロネー！」

「コロネ殿！」

見知った顔に、わたしは「あつ」と声を出す。

「デリック！ レイラも！」

わたしと同世代くらいの男女の冒険者パーティ。

武骨な剣たすきを携えた剣士のデリックと、スラッと伸びる美しい細剣を腰に差した魔法剣士のレイラ

だった。

この二人はわたしが異世界に来た直後に出会った人たちだ。

冒険者ギルドに行ったらよく出会うから、もうすっかりお友達になつてい

ただ、今回は様子が違った。いつもは基本的に二人で行動しているけど、デリックたちの後ろからさらに二人の女の子が顔を出した。

「わっ、本当にコロネさんがいました!」

「あっ、え、ええと、こ、こんにちはっ!」

彼女たちは、赤髪と青髪の双子だった。顔立ちがよく似ているけど、性格や態度は正反対。

近くに来ると、彼女らの体に染み付いた甘い香りがふわりと漂ってくる。

わたしは予想外な二人の顔を見て、驚きで声を上擦らせた。

「アリアちゃんに、イリアちゃん!? なんで二人がここに!?!」

双子の女の子、赤髪のアリアちゃんと青髪のイリアちゃん。

今は私服だから分かりにくいけど二人は王都で出会ったパティシエの卵であり、わたしとともにベルオウンまでやって来た。

来訪の目的は、長年の夢だったスイーツ店をベルオウンで開くためだ。

この子たちが作るスイーツはともクオリティーが高くてもちやくちや美味しく、さらにわたしが日本で親しまれていたスイーツの知識を授けたことで才能が爆発してしまったのだ。

そう言えば一ヶ月ほど前にベルオウンに到着してからは、スイーツ店を開くための準備に取りか

かるとのことで別れていた。

だからアリアちゃんとイリアちゃんに会うのはちょっと久しぶりな感覚がする。

デリックが親指でアリアちゃんたちを指差して言った。

「レイラと一緒に《魔の大森林》に向かつてたら、ベルオウンの門の前でこの子たちが忙しくうろしてよ。どうしたのか聞いてみたら、コロネを探してるとか言ってるな」

「私たちも急いでいたわけではなかったので、《魔の大森林》の近くまでならコロネ殿を探すのを手伝うと申し出たのだ」

「さすがに《魔の大森林》の中まで連れていく気はなかったけどな。でも、森の手前でコロネを見できて良かったぜ!」

森の中に入るとどんな魔物が襲ってくるか分からないから、自衛の手段に乏しい一般市民を連れ歩くのは危険が大きすぎるもんね。

ここまでアリアちゃんとイリアちゃんを守って連れてきてくれたことに感謝する。

「そ、そうなんだ。二人ともクエストを開始する前だったのに、ありがとね」

「なんか急いでたみたいだったからな。たまたま遭遇したからついでに声かけただけだし、気にすんなよ」

「それに探している相手がコロネ殿だったしな。コロネ殿の知り合いなら、余計に見捨てることはできない」

レイラの義理堅さは相変わらずのようだ。

わたしは苦笑混じりに、アリアちゃんといリアちゃんの元に歩みを進めた。

「それで、二人はどうしてここに？ 何かあったの？」

「こんな所までやって来てごめんなさい！ 実は、ずつと探していたスイーツ店のテナントが商業ギルドでようやく見つかったんですけど、それが急ぎよ取り止めになってしまつて……！」

「ええっ!? ど、どうして?」

「ビ、〈獅獣の剛斧〉、つていう、冒険者ギルドが、待つたをかけた、らしくて……」

イリアちゃんが、緊張を抑えながら説明してくれる。

その中の一つのワードに、わたしは眉をひそめた。

「えっ、〈獅獣の剛斧〉……!?」

〈獅獣の剛斧〉、という言葉から良いイメージは浮かんでこない。

それもそのはず。〈獅獣の剛斧〉はベルオウンに居を構える超有力な冒険者ギルドだけど、その実態はロクなものじゃない。

ギルドマスターのダルガスとかいう男はベルオウンの街を武力によって不当に支配しようと画策して領主のアルバートさんと敵対しているし、そこに在籍している冒険者たちもガラの悪い連中が目立つ。

「でも、どうして〈獅獣の剛斧〉のことをコロネお姉ちゃんに？」

ナターリヤちゃんもつともな疑問を口にする。

たしかに〈獅獣の剛斧〉とは多少の因縁はあるけど、そのことはアリアちゃんたちには伝えてい

ないはず。

すると、アリアちゃんが言いにくそうに視線を落とした。

「それが、ですね。商業ギルドの職員にどういふことか問い質すと、〈獅獣の剛斧〉が待つたをかけた理由はコロネさんにある、と返答されました」

「えっ!」

「なんで!? まったく心当たりないんですけど!」

イリアちゃんが続ける。

「そ、それが、その、〈獅獣の剛斧〉の偉い方が、コロネさんと話をするまで、このテナントは貸し出さない、と強い姿勢を、見せていて……」

「そのテナント、元々は〈獅獣の剛斧〉のギルドに所有権がある建物だったみたいで……。このままだじゃ永遠にストップをかけられてテナントを借りることができない状況なんです……!」

「ほ、他の物件も、見たんですけど……あ、あんまり、良さそうな所が、なくて……」

……う〜ん。わざわざわたしを名指しで呼び出して話し合いを希望するなんて。

しかも相手は〈獅獣の剛斧〉のお偉いさんとやら。
〈獅獣の剛斧〉、ギルドのお偉いさん、コロネの指名、この三つから導き出される内容は不穏な匂いしかしない。

「あの、ちなみになんだけどき、そのわたしを呼び出してる〈獅獣の剛斧〉のお偉いさんの名前……」

わたしの言葉にいち早く反応したアリアちゃんが、食い気味で答えた。

「はい！ その人は、ダルガスさんという方でした！」

はい、ビンゴー！ やつぱりアイツか！ その名前にデリックとレイラが反応する。

「何、ダルガスだと!?」

「ど、どういふことだ!?」

きな臭い匂いプンプンだったけど、これでもうほぼ確定だ。きつと、ダルガスの狙いは――

「……わたし、か」

ナターリヤちゃんが不安げに眉を曲げた。サラも心配そうな様子だ。

「コロナお姉ちゃん、どうするの……?」

「ぶるうん……?」

仕方ないね。今までのらりくらりと躲してきたけど、いい加減腹を括るべきなのかもしれない。

アリアちゃんとイリアちゃんがわたしの手を取り、瞳を潤ませた。

「どうにかありませんか、コロナさん！ 他に目ぼしいテナントはなくて、これを逃すと私たちの

お店が開けなくなっちゃうかもしれません……!!」

「お、お願い、します！ コロナさん……!」

この二人の助けを求める懇願が、決定的にわたしの背中を押してくれた。

「ダルガスめ……一体どういふつもりか知らないけど、売られた喧嘩は買ってやろうじゃない」

もう、迷いはない。

予期せぬ形にはなつたけど、最初から真つ向勝負ならむしろ分かりやすくして良いかもしれない。

縋るような目で見上げるアリアちゃんとイリアちゃんに向き直り、彼女たちと目を合わせて力強

く頷いた。

「わたしがダルガスと話をして、どうにか上手く話をまとめてくるよ！」

隙あらばわたしを排除しようとしているベルオウンの悪徳ギルマス――一体どんな男なのか、直

接確かめてやろうじゃない！

第二章 ダルガスと初対面しちゃう、ぼっちゃり

わたしがアリアちゃんとイリアちゃんの申し出を了承した直後、二人は先んじて、わたしが今から向かうことを商業ギルドに伝えに行ってくれた。

わたしたちはクエスト完了報告だけ冒険者ギルドで済ませてから、今はパーティーメンバー勢揃いでベルオウンの大通りを歩いている。

「で、そのダルガスつちゆう人間はナニモンなんや?」

舗装された石畳をてくてくと小さい足で歩きながら、わいちゃんが尋ねた。

そう言えば、わたし、ナターリヤちゃん、サラ、わいちゃんの四名の中で、一番最近入ったわい

ちゃんだけはダルガスや〈獅獣の剛斧〉のことを知らないんだよね。

わたしは要点だけを簡単に説明した。

「この街で乱暴な行動をしている〈獅獣の剛斧〉って冒険者ギルドのギルマスだよ。ちよつと訳アリで、一方的に目の敵にされてるっほいんだよね」

「なんやて!? ご主人に矛先を向けるやなんて、とんでもない不屈き者やないか! なるほど、つまり今からそいつにカチコミかけに行く訳やな!!」

「いや、違うよ!」

まあ、絶対そうならないとは言えないけど。衝突するかどうかは、向こうの出方次第だ。

「ま、わたしとしては穏便に済ませられるならそれに越したことはないと思ってるよ。それが一番丸く収まるし」

デリックとレイラの二人も同席しようとしていたけど、丁重にお断りしておいた。

二人ともダルガスへのヘイトが高いから、余計な摩擦が生じるかもしれないし。

あくまでも今回はアリアちゃんたちが聞くお店のテナント確保が目的だから、不用意に争う事態になるのは得策じゃない。

わたしと歩調を合わせながら、ナターリヤちゃんが不安そうに眉を寄せた。

「でも、そんなに平和的に解決できるかな……? その、〈獅獣の剛斧〉の人たちの性格的に……」
ナターリヤちゃんがかつて〈獅獣の剛斧〉所属の冒険者パーティに不当に報酬金を奪われて暴行沙汰になりかけた経験がある。

そのトラブルはたまたま居合わせたわたしがゴロツキ冒険者らを追い払って解決したけど、当時

の良くない記憶が蘇っているのだろう。

「さすがに交渉の席で殴りかかってくるほど単細胞じゃないことを祈ってるよ。今回出てくるのは仮にもギルマスな訳だし。まあでも、拳でやり合うっていうならそっちの方が簡単そうではあるけどね」

「ぷるるっー!」

フッフッフ……、と不敵な笑みと共に拳を握るわたしの肩の上で、サラもエールを送るように元気に震えた。

と、そんな話をしていたら目的の場所に到着したようだ。

「ここが商業ギルドか。何気に初めて来たな」

大通りの端に面した通りに居を構える、白を基調としたシンプルなデザインの建物。

外観のファンタジックさは薄く、むしろ街の市役所って雰囲気強い。面白いオブジェクトや趣向を凝らした看板などはなかった。

扉を開けて中に入ると、大きなフロアが目に入る。

奥には数人の受付嬢さんが横並びで座り、その全てに数人の先客が列を成して並んでいた。

規則的に配置された内装や造りは清潔感がある。

「あ、コロネさん! お待ちしてました!」

「こ、こちら、です……!」

声の方に顔を向けると、商業ギルドの端から小走りで駆けてくる双子の姿があった。

「アリアちゃん、イリアちゃん。待たせちゃったかな？」

「いえ、全然です！ 二階の奥の部屋を用意していただきました。もう先方は到着しているみたいですよ！」

「へえ……もう来てるんだね」

わたしは心の中にかすかに燻る敵意を努めて抑える。アリアちゃんたちが手元の資料を見ながら案内してくれ、ギルド内を移動していく。

ギルド端の階段を上がって二階に向かい、商談や交渉ごとを行う専用エリアらしき通路を真っ直ぐ進んでいく。

通り過ぎる部屋からは、真剣なトーンで話し合う人たちの声が漏れて聞こえた。

横目で通路両端の部屋の扉を眺めていると、先導していたアリアちゃんとイリアちゃんがぐるりと振り返った。

「ここが職員の方にご用意していただいた部屋になります！」

「なり、ます……！」

この部屋の奥に、アイツが――！

アリアちゃんがノックをすると、中から「入れ」と低い男の声が聞こえ、入室していく。

イリアちゃんも後に続き、わたしも顔を引き締めた。

さて、〈獅獣の剛斧〉を束ねるギルマスはどんな男なのか、そのご尊顔を拝ませてもらおうじゃない！ わたしも意を決して開かれた扉をくぐって部屋に足を踏み入れる。

瞬間、押し潰すような威圧感が肌を撫でた。

部屋の真ん中に置かれたテーブルと、それを挟んで両脇に配置された横長のソファ。

その上座の位置にふんぞり返って腰を下ろすガタイの良い男と目が合った。

「……アンタが、ダルガス？」

「そうだ。お前がコロネだな」

五十歳くらいの見た目のガタイの良い男――ダルガスは葉巻を啜えながら口の端を歪めた。

中年太りのようにお腹は出ているけど、腕や足は太く逞しい。

オールバックに逆撫でた灰色の髪はライオンのたてがみのような荒々しい雰囲気醸し出している、服装は成金と冒険者を足して二で割ったようなスタイルだ。

一目見ただけで、金・武力・権威を直感的に感じさせられる男だった。

「まずは座れ。『話し合い』をしようではないか」

ダルガスは悠々と葉巻を吸って濃い煙を吐き出し、着席を促す。

相対しているだけで凄まじい気迫で、部屋の中が酷く重苦しい。

怒りなのか闘気なのか分からないけど、とにかく物騒なオーラが部屋中に満ちていた。

こういう荒事に慣れていないアリアちゃんとイリアちゃんは少し怯えている様子だ。

わたしは「大丈夫だよ」と言って双子の肩にポンッと手を置き、葉巻の煙が立ち込めるテーブル席へと先陣を切って向かった。

見下すようなダルガスの視線を無視して対面のソファに到着したわたしは、ゆっくりと右手を前

に向けた。

「——ウインドウエーブ」

突如、わたしを中心として軽い突風が巻き起こる。

立ち込めていた葉巻の煙はその風に飲まれて霧散し、視界がとてもクリアになった。

「わたし、息苦しいのは苦手だから。タバコは話が終わってからにしてみらっても？」

その言葉と同時に、ダルガスが啞えていた葉巻の先端がボトリと灰皿へ落下した。

風魔法の中に極小ウインドカッターを潜ませ、葉巻の先端部分だけを切り落としたのだ。

これで副流煙の問題は解決した。

「……フツ、クハハハ！」

しばし呆気に取られていたダルガスは、豪快に笑い出す。

啞えていた葉巻の残りをグシャリと力任せに握り潰し、バラバラに破壊された無数の葉の欠片をまぶすように灰皿へ捨てた。

「この俺に向かってそれほど豪胆に振る舞えるとは、噂以上に肝の据わった女らしい。それとも、ただの命知らずの馬鹿なのか？」

わたしは無言でソファの真ん中に着席した。ダルガスと真正面から向かい合う形だ。普通の交渉事ならここはアリアちゃんとイリアちゃんが座る場所だろうけど、この場だけは話が異なる。

「な、なんやアイツは……!? とんでもない強さを秘めてるっちゅうことがアリアリと感じられるで……!」

「で、でも、コロナお姉ちゃんがいるから大丈夫だよ!」

「ぶるるっ!」

背後でパーティメンバーがヒソヒソ話をしている。

と、呆然としていたアリアちゃんとイリアちゃんがハッと意識を取り戻す。

すると二人はわたしを挟むようにして両脇に着席した。わたしの右にアリアちゃん、左にイリアちゃんが腰を下ろす。

ナターリヤちゃんもわたし側のソファの端っこに座り、サラとわいちゃんもダルガスを警戒しながらナターリヤちゃんにくっついていた。

アリアちゃんが咳払いをして、持ってきた資料をテーブルに広げる。

「こ、今回はご足労いただきありがとうございます。それで、事前にお話しさせていただいていた例のテナント契約に関してのことなのですが——」

「その前に、そのコロナと話すべきことがある」

ダルガスは不遜な態度でわたしに鋭い視線を向ける。

予想通りの展開に、わたしはため息を吐いた。

「やっぱり、わたしを呼び出すのが目的だったんだね。これまでも色々と嗅ぎ回っていたようだし」

「嗅ぎ回っていたとは人聞きの悪い。有望な冒険者のことを知りたいと思うのは、冒険者ギルドのギルドマスターとして当然ではないか」



「今回のテナント貸し出しの中止とかいう難癖だって、わたしを引きずりだすための方便でしょ。わたしと話したいんだったら、こんな回りくどいことしないでくれる？」

「フツ。手ぶらで望んでもお前と腰を据えて話をすることはできない」

「……まあ、それは否定できない。」

街で普通に話しかけられてたら、多分シカト決めて無視してただろう。

ダルガスは上体を前に落とし、やや前のめりになってわたしの目を見据えた。

「単刀直入に言おう。コロネよ、〈獅獣の剛斧〉^{ビーストブックス}の専属冒険者になれ」

「……は？」

ダルガスはニヤリと笑う。

「お前は高難度のクエストも平然と達成するかなり実力派の冒険者だそうではないか。先日の王都でのドラゴン騒動を無事に解決した功績も耳にしている」

ダルガスは一拍置いて、続ける。

「俺のギルドメンバーとなればこの街でさらなる名声を得ることができるぞ。それにクエスト報酬も破格の値をつけてやろう。どうだ、冒険者としてこれほどの好条件はあるまい。ああ、それとこのテナントだったか？ コレも無期限で貸し出しを許可してやるし、賃料だって割り引いてやってもいい」

ダルガスはアリアちゃんが提示した資料をトントンと指で叩いた。

アリアちゃんとイリアちゃんをダシにしてわたしを呼び出した時点で分かっていたことだけど、

この双子とわたしに繋がりがあはることはバレてゐるらしい。

「コロネちゃん……！」

「コロネお姉ちゃん……！」

「ご主人……！」

「ふるん……！」

全員の視線がわたしに集中する。要は、わたしが〈獅獣の剛斧〉に所属することを了承すれば今の交渉は全て丸く収まるということ。

わたしは冒険者として富と名誉を築き上げてベルオウンの街でその名を馳せることができ、〈獅獣の剛斧〉はさらなる武力を誇示して存在感をアピールできる。おまけにアリアちゃんたちのテナント問題も解決。

わたしがこの場で頷くだけで、全員ウインウインで皆がハッピーになれる……という筋書き。

それら全てを理解した上で、わたしは真つ向からダルガスに眼差しを向け、はっきりと答えた。

「――断る。わたしは〈獅獣の剛斧〉には属さない」

ダルガスは眉間に皺を寄せて睨みつけてきた。だけど、そんな言外の脅しには屈さない。

数秒の沈黙の後、ダルガスがざらついた声色で告げる。

「……なぜだ？」

「単純に、〈獅獣の剛斧〉っていうギルドがわたしと相容れないからだよ。わたしを仲間に取り入れたいなら、色々と改めるべきポイントがあるんじゃないかな。ギルドの方針とか、在籍している

冒険者のモラルとか——ギルドマスターの横暴な振る舞いとか」

最後の部分を強調して言つてやつた。

ダルガスはかすかに震え、メギギツ……と鈍い音が拳から鳴つた。

見てみればダルガスの筋骨隆々の太い腕が右石のように硬く張り、握られた拳は今にもわたしたちに繰り出されそうな勢いだ。

ダルガスの殺意に近い憤怒に、アリアちゃんたちが狼狽する。

「コ、ココ、コロネさん……！」

「大丈夫だよ。皆はわたしが守るから」

バリア魔法の発動準備はとつくに済んでいる。

さらに身体強化でわたしの動体視力も跳ね上げていた。

油断することなく、集中してダルガスを見ている。

もしダルガスが襲いかかってきたとしても、攻撃が届くよりもバリアの発動の方が速い。

不穏な空気が流れ、張り詰めた緊張感。それを、予期せぬ闖入者が打ち砕く。

「――なら、俺から新しい提案をさせてもらおう」

背後の扉がガチャリと開かれ、クールな低い声が響いた。

ダルガスの意識がわたしの背後に逸れ、怪訝に目を見開く。物騒なオーラが弱まった。

わたしが後ろを振り返るより前に、部屋に入つてきた人物はわたしたちが着席するテーブルの横

に歩みを進めた。その姿を見て、わたしはその名を叫ぶ。

「ア、アルバートさん!」

この街、ベルオウンを治める領主でありウォルトカノン公爵家の当主である、アルバート＝ウォルトカノン。

派手さは控えめだけど十分に高級さが伝わる貴族らしい装い。成金のような身なりのダルガスとは対照的に、クラシカルな威厳に包まれた正統派の風体だ。

超権力者である大貴族様は、わたしを一瞥して小さく笑う。

ダルガスはあからさまに不機嫌さを醸し出しながら、どっかりとソファに背を預けた。

「……これは、アルバート殿。このような場でお会いするとは奇遇ですが……他人の商談に割って入るとは、どういう了見ですか?」

「無論、商談に横やりを入れるつもりはない。だからコロナが答えを出すまで待つていたのだ。そして、コロナはお前の申し出を断った。つまり交渉は決裂したということだろう?」

アルバートさんは、脇を抱えていた積み重なるファイルをわたしたちの前に広げた。数にして十個以上ある。

「我がウォルトカノン家が管理している空き物件だ。ひとまず手当たり次第にかき集めてきた」
ファイルを開いてみると、色々な建物が外観のイラスト付きでいくつも収められていた。

立地や間取り図なんかも詳細に記載されている。よく見る不動産資料といった感じだった。

「アリア嬢とアリア嬢はスイーツ店を開くための物件を探していると聞いた。ダルガスとの交渉が終わったのであれば、今度は俺が提供する物件を見てみないか?」

「え、ええーと、あの、聞き間違いでなければ、ア、アルバート様って、もしかして……!!」

「こ、こここの街の、り、領主様、ですかあ……!」

まさかの領主様の登場に、アリアちゃんとアリアちゃんは驚きを隠せないでいるようだ。

まあ、いきなりこんな貴族様が現れたら狼狽するのも無理はない。

だけど、アルバートさんの登場で場の空気は一新された。

アリアちゃんたちも、ダルガスに対する恐怖からアルバートさんに対する緊張に感情が移っている。

「チツ……無作法な領主め」

旗色が悪いと察したダルガスは、ぶっきらぼうに立ち上がる。

部屋を出ていこうと足を踏み出そうとしたダルガスに、わたしは告げる。

「帰る前に一つだけ言っておくけど、デモールは王都で倒したから」

ダルガスは見下すような視線だけをわたしに突き刺した。

「……誰だそいつは?」

「とぼけるのは自由だけどさ、もう鬱陶しい刺客とか送り込んでこないでよね。どうせアンタの部下じゃ相手にならないし、時間の無駄だから」

デモールは自らを『ダルガスと契約した悪魔』と称していた。

王都で襲ってきた時に灰に帰したから詳しい情報はもう聞き出せないけど、ダルガスの関係者であることは割れている。

ダルガスは部屋の扉へと歩みを進め、吐き捨てるように言った。

「精々、この俺の誘いを断ったことを後悔しないことだな。お前たちも、アルバート殿も、『不運』が舞い降りることがないよう祈っているぞ」

部屋の扉に手をかけ、脅迫めいたことを告げるダルガス。

わたしはダルガスに体を向ける。

「それなら、わたしも最後に一つだけ」

ダルガスの動きがピタリと止まった。

視線だけをわたしに向ける大男に、わたしも真剣な面持ちで対峙した。

「もし、わたしの仲間や友達に手を出したら許さないから。その時はアンタに待ってるのは『不運』なんて生易しいモンじゃない。——『破滅』一択だよ」

わたしは声を低くし、凄みを出す。

ダルガスが放つオーラを塗りつぶすように威圧する。

わたしを一瞥したダルガスはすぐにドアノブを回し、鬱陶しそうに鼻を鳴らして荒々しく扉を閉めた。

○ ○ ○

「やれやれ、なんとか乗り切ったな」

ダルガスが立ち去った後、アルバートさんが短く息を吐いた。

わたしはアルバートさんに向き直る。

「ありがとう、アルバートさん。一触即発の雰囲気だったから、助かったよ。でも、どうしてここにわたしとダルガスがいるって分かったの？」

「デリックとレイラだ。あの二人が当家の屋敷にやって来て、何事かと思ったらこれからコロネとダルガスが物件に関する交渉を行うと聞いてな。恐らくただ事では済まんだろうと思い、急いで駆けつけたというわけだ」

アルバートさんは、テーブルに広がった複数のファイルに視線を落とした。

「その不動産ファイルも、適当にかき集めたものでな。一応我がウオルトカノン家が管理している物件であることは事実だが、正直コロネたちが求めている条件と合致しないモノも多数含まれているだろう」

「あくまでもパフォーマンスの一環ってことだね」

アルバートさんは、ああ、と頷いた。いきなりアルバートさんが現れた時は驚いたけど、おかげで流れが良い方向に変わってダルガスを撤退させることに成功したよ。

「お、お話の途中にすみません。あの、コロネさんと領主様はお知り合いなんでしょうか……?」
「アリアちゃんが意を決した様子でおおずと尋ねる。

「あれ、言っただけです！ て、ていうか、コロネさんってどんだけ顔広いんですか!? 王都でも名だ

たる豪商のドルート様と平然と話してましたし!!」

「ふんふん!!」

血走った目で詰め寄るアリアちゃんと、その背中に隠れながら激しく首を縦に振るイリアちゃん。わたしは苦笑しながら二人をなだめた。領主のアルバートさんも、大商会を取り仕切るドルートさんも、旅や冒険の成り行きでいつの間にか仲良くなつて関係が構築できただけだ。

「それで、コロネたちが探してる物件は具体的にどんな条件なんだ？ 乗りかかった船だし、相談に乗ってやるぞ」

アルバートさんのありがたい申し出を受け、わたしが大まかな使用目的と立地や賃料なんかの条件を伝えた。

アリアちゃんとイリアちゃんは萎縮してしまつて領主様と対等に話せそうになかったので、わたしが二人から条件を聞き出してアルバートさんに通訳した形だ。

そうしてしばらくお互いの条件のすり合わせを行っていると、部屋の扉がコンコンとノックされた。アルバートさんが入室を促すと、入ってきたのは黒い燕尾服に身を包んで背筋を伸ばした初老の男性。

わたしは反射的に声が出た。

「あ、グラハムさん」

「お久しぶりでございますコロネ様。私のような者の名を覚えていただけていたとは、光栄でございます」

「それで、どうした？」

片手を胸に添え、完璧な所作でわたしにお辞儀をしたウォルトカノン家の執事、グラハムさんは、アルバートさんに答える。

「ベルオウン北方の『復興地区』の管理を担う復興支部長——ジルドアから、緊急の連絡が」

「……何があつた？」

アルバートさんの視線が鋭くなる。グラハムさんは瞑目して小さく頭を下げ、続ける。

「瓦礫の撤去作業中、全壊した民家の下から厄介な物が発見されたそうです。そのせいで、復興作業が全面ストップしております」

「厄介な物？」

「はい。見たところ、『バーストゴーレム』の死体ではないかと」

「バーストゴーレムだと!？」

アルバートさんが目を見開く。

名前からして魔物っぽいけど、そんなにヤバイやつなのかな？

「バーストゴーレムつちゆうたら、倒した時にドッカーンって爆発する魔物やないか。基本は死ぬ間に爆散して跡形も残らんのやけど、死体が掘り出されるなんて珍しいな」

「わいちゃん、知ってるの?」

「もちろんや! 《魔の大森林》の奥の方にある岩窟とかに擬態して生息してるわ。前にドンパチやったこともあるから、間違いないで!」

トコトコとテーブルの上を小さなもふもふボディで移動しながら、物騒なエピソードを聞かせてくれた。見た目は癒し系のもふかわ魔物だけど、中身はめっちゃ強いドラゴンだからね。

「妙な面持ちだったアルバートさんの視線が、わいちゃんに注がれる。」

「む、そいつは……」

「王都で仲間にしたドラゴンだよ」

「ああ、コロナが従魔にしたというヤツか……ハッ、そうだ！」

「わっ！ 何っ!？」

突如アルバートさんが詰め寄る。わたしは反射的に一步後ずさった。

アルバートさんは活路を見出だしたように真剣な眼差しを送ってきた。

戸惑うわたしに、早口で告げる。

「ここにはコロナがいるじゃないか！ コロナならこの問題、穩便に解決できるんじゃないか!？」

「……え？」

あの、これってもしや……爆発物処理を命じられてる!？」

第三章 復興地区を再利用しちゃう、ぽっちゃり

スイーツ店のテナント物件探しから一転——わたしは危険な爆発物を処理するため、ベルオウン

北方の地区へと駆り出されていた。

危険なのでアリアちゃんとイリアちゃん、それからナターリヤちゃんは先ほどの商業ギルドで待機してもらっている。

徐々に人気ひとけが少なくなり、荒廃こうはいとしてきた通りを、アルバートさんと歩く。

「どうしてこうなった……!？」

「すまないなコロナ。俺たちの力だけで解決できるならそうしたんだが」

申し訳なさそうに眉を下げるアルバートさん。

その背後に控えた執事のグラハムさんが続ける。

「バーストゴーレムは爆発性の核コアを体内に宿した魔物です。体内の中心部を起点に大爆発が起こり、肉体を構成する岩石がバラバラに砕け散ることです全方位に無差別攻撃をする習性がございます」

アルバートさんが頷いた。

「それが今回はゴーレムの形を保った状態で発見された。つまり、まだ体内には爆発性の核コアを宿したままの可能性が高い。人通りが少ない地区とはいえ、こんな市街地で大爆発が起これば混乱は避けられないだろう。だからここは領主として、この街の住民の安全を第一に守るため、コロナに頼ることを決意したのだ」

「まあ、話は分かるから良いんだけどさ」

いわゆる不発弾みたいなモノってことだね。もしくはメガ○テか。

「発見されたのが死体なんやったら、正味いつ爆発してもおかしいで。ほんまやったら些細ささいな刺

激にも細心の注意を払うところやけど、単純に死体を撤去するだけなんやったらわりとイケるんちやいまつか？」

舗装が行き届いていないガタついた石畳をトコトコと歩きながら、わいちゃんが言う。
わたしはその言葉に頷いた。

「だね。要はバーストゴーレムの爆発を起こさないようにしたら良いだけだから、律儀りちぎに死体を遠方に運ぶ必要もないわけだし」

わたしには、こういう時に無類の強さを発揮する仲間がいるからね！

そのまま歩いていると、前方にヘルメットを被った作業員みたいな人が数名立っているのが見える。その中の一人がわたしたちに気付くと、慌てて駆け寄ってきた。

「ア、アルバート様！ どうしてこちらに!？」

「ジルドアか。バーストゴーレムの死体が発見されたとあっては、領主として現場に向かわないわけにはいかないだろう」

ジルドアって、グラハムさんの説明に出てきた『復興支部長』だっけ。てことは、この人がこの現場の責任者か。幹部かんぶなだけあって、現場作業員よりは上等な身なりをしたおじさんだ。

「き、危険です！ どうかお下がりを」

「構わん。それよりも、バーストゴーレムはどこだ」

「は、はっ……こちらに」

アルバートさんに押され、ジルドアさんが案内を引き継ぐ。

わたしも着いていくと、黄色い膜のようなバリア魔法が見えてきた。

そのバリアの中は多数の瓦礫で埋もれていて、その中央に全長二メートルくらいの物騒な巨体が横たわっているのが見えた。

古びた岩石がいくつも合体して人型を形成していて、まるで岩でできたフランケンシュタインのような印象を受ける。

「あ、あれがバーストゴーレム……!」

初めて見る魔物の素性を確認するべく、わたしは神さまからもらったスキルの一つ——『食しょくの鑑かん定てい』を発動させる。

名称：バーストゴーレム

《魔の大森林》に生息する魔物。

シンプルな鑑定結果が表示された。

わたしの『食の鑑定』は食材の鑑定時は無類の性能を発揮するものの、食材以外の鑑定では一気にポンコツになるというデバフを背負っている。これどうにかなんないかな、マジで。

「でも、『食の鑑定』がロクに機能しないってことは、バーストゴーレムは食べれるところがないってことか。いや、別に食べたいとも思わないだけださ」

やや瓦礫に埋もれているのも相まって、もはやただの作業現場に山積みされた土砂のような感

じだ。さすがのわたしでも、コレで食欲は刺激されない。

「簡易的なバリア魔法は施しているのですが、恐らくバーストゴーレムの爆発には耐えられません。ですので先ほどから、防御系の魔法に秀でた者らを呼び集めています。グラハム殿にも、その協力をしていただいているところですので……」

「それでは時間がかかるだろう。できれば今すぐに解決してしまいたい」

アルバートさんは神妙な面持ちで、わたしに視線を移した。

「コロネ、どうだ。いけそうか？」

「うん。これなら余裕だと思っ！」

わたしはニツと笑い、肩に乗るぷるぷるのスライムを撫でた。

「出番だよ、サラ！ 話は聞いてたよね？」

「ぷるん！」

サラがぽよんと跳ねてわたしの肩から地面に着地した。

そして一直線に、バーストゴーレムの元へ直行していく。

「ぷるるーんっ!!」

その行動に、反射的にジルドアさんが手を伸ばした。

「な、何を!?」

「大丈夫だよ。あの子に任せるのが、一番簡単で安全だから」

サラのスライムボディは、大量の魔物を吸収することができる！

いくら巨体のゴーレムでも、サラなら簡単に体内に取り込めるはずだ。

あとは適当に《魔の大森林》の奥にでも行って、嚴重にバリアを張った状態でサラにバーストゴーレムを吐き出してもらい、意図的に起爆させれば終了である。完璧な解決策だ。

そしてサラはわたしの理想通りの働きをしてくれ、一瞬でバーストゴーレムを吸収した。

大きく膨らんでうのようにと蠢くスライムボディに吞まれたバーストゴーレムは、起爆する暇もなくサラの体内に収まった。

「ぷるんっ！」

ものの数秒でバーストゴーレムを吸収し終えたサラは、瓦礫の真ん中で元気にジャンプした。

ジルドアさんは目の前の光景をいまだ信じられない様子で、ばちくりと瞬きをしている。

「あ、えっ……？ バーストゴーレムが……消え、た……？」

「サラは魔物を体内に吸収することができます。一回吸収したら吐き出すまで体内に保管されるので、もうバーストゴーレムが不用意に爆発する危険はないですよ」

「そ、そうなのですか……？ あ、ありがとうございます」

ジルドアさんはまだ理解が追いついていなさそうだけど、無理やり状況を飲み込んで頭を下げた。アルバートさんはフツと笑い出す。

「はは、コロネに頼めばこうも容易く解決してしまうとは。多少なりとも気を張ってはいたんだが、拍子抜けした気分だな」

「ま、これくらいならサラの力を借りればいいだけだしね」

「感謝する、コロネ」

アルバートさんも真摯な表情で頭を下げてきた。

「いやいや、別に大したことじゃないから。これくらいなら大丈夫だよ」

「すまないな。コロネに借りばかりが増えていってしまうのは心苦しいが……」

「アルバートさんにはいつも助けられているから、もうお返しはもらってるよ」

実際、アルバートさんには色々と面倒を見てもらい、サポートしてもらっている。

異世界暮らしに慣れないわたしにとっては、これ以上ないくらいありがたい存在だ。

すると不意に、遠くから鈴を転がしたような声が響いてきた。

「——お父様ー！ お父様ーっ!!」

「なっ、オリビア!？」

こちらに走ってくるのは、ドレス姿の貴族少女——オリビアだった。

雪のような銀髪を揺らして、わたしたちに向かって手を振ってくる。

慌てた様子で追いかけている数名の執事やメイドたちを振り切らんばかりの勢いのオリビアは、

わたしを見てパッと顔を明るくさせる。

「あ、コロネさんもいるじゃないですか!? それにサラちゃんも!」

「オリビア、久しぶりだね」

「ふるん!」

王都から帰ってきて約一ヶ月くらい、オリビアと会っていなかった。

まあオリビアは貴族のご令嬢だし、わたしみたいな一般人よりも色々と忙しいんだろう。

わたしにダイブしてきたオリビアを受け止め、綺麗な銀髪が煌めく頭を軽く撫でた。

と、オリビアが足元に目をやった。視線の先にはわいちゃんの姿。

「わあ! この可愛いもふもふちゃんは何んですか!? 新しいペットですか!？」

「なっ、誰がペットや! わいは誇り高きドラゴン族の生まれで、次代のドラゴンを統べる女王と

して君臨する偉大なる——」

「うわあ、もつもふで可愛いです〜!」

「ぬわあ!? き、気安くわいの体をつ! からだを……ほわあ……」

オリビアになでなでもふもふされてわいちゃんの顔がとろけていく。

わいちゃんは撫でられるのが好きなんだね。

もふもふの体をバウンドさせるように撫でるオリビア。

楽しそうに笑みを浮かべるオリビアの横に、厳しい顔をしたアルバートさんが詰め寄った。

「オリビア! どうしてお前がこんな所にいるんだ!」

やや怒りのオーラをまとわせるアルバートさんに、オリビアの付き添いのメイドたちが恐縮した

様子で答えた。

「も、申し訳ありません。な、なんとか私どもも止めようとしたのですが……」

「話は聞きました! バーストゴーレムの死体が発見されて困っているんですね? ジルドアが

防御系の魔法に秀でた者を至急召集していると耳にしたので、いても立ってもいられず現場に参っ

たのです！」

「防御系の魔法って……ああ、そういえば前にオリビアが使ってたっけ」

「はい！ 防御魔法の基礎——『シールド』です！」

オリビアは片手を上げる。その小さな手のひらの上に、白っぽい障壁のようなものが出現した。オリビアが指でつつくと、コンコンと硬質な音が鳴る。

「防御魔法には私も心得があるので、力になれると思います！ それで、バーストゴーレムはどこですか!？」

「あー、急いで来てもらったところ言いにくいんだけど……バーストゴーレムの問題はもう解決しちゃったんだ」

「へ？」

バーストゴーレムの死体が横たわっていた瓦礫の中から戻ってきたサラを抱き上げ、なでなでした。

「さっきサラがバーストゴーレムを吸収してくれたの。だからもうバーストゴーレムが爆発して危険が及ぶことはないよ」

「そ、そうなのですか……良かったです！ さすがサラちゃんですね！」

「ふるるん！」

オリビアに褒められたサラは嬉しそうに震えた。

一連の様子を傍から眺めていたアルバートさんは、なんとも言えない表情のため息を吐いた。

「オリビア。力になろうとしてくれるのはありがたいが、こういう危険な仕事はお前にはまだ早いと言っているだろう。今回はちょうどよくコロネがいてくれたから簡単に解決ができたものの、本来ならバーストゴーレムの死体の撤去はかなり危険のある行為なんだぞ」

「わ、分かっています！ ですが、領主の娘として保身のために危険な問題を見て見ぬフリはできません！ 微力でも力になれることがあるなら、私は協力を惜しみません！」

「領主の娘として自覚があり過ぎるのも困りものだな……」

嬉しいような心配なような色んな感情が混ざった顔でアルバートさんが呟いた。

まあ、今回は無事に解決したから良かったよね。

「それにしても、この辺り……本当に復興地区って感じだね。まるで災害に見舞われたみたいなのわたしは改めてぐるりと周囲を見渡した。

普段わたしたちが暮らしているベルオウンの中心街とは大違いだ。周囲には人気も華やかさもなく、壊れた民家や瓦礫が積み重なるばかり。生々しい傷跡が残っている。

「——七年前、魔物の群れによってベルオウンが襲撃された事件は知っているか？」

周囲の惨状を眺めるわたしに、アルバートさんがぼつりと尋ねてきた。

「えっと、前に冒険者ギルドで軽く聞いたような。たしか街の外壁が破壊されて、街の中に魔物たちがなだれ込んできたんだっけ。あ、もしかしてこの場所って……」

「そうだ。ここが魔物の侵入を許し、市街戦となった戦場なんだ」

思わずわたしは言葉を失った。

そうか……今いるこの場所で、人間と魔物が戦ったのか。

アルバートさんは鋭い眼差しで周囲を眺めた。

「今となっては忌々しい限りだが、ここに訪れる度にダルガスの獅子奮迅の戦い振りを思い起こされる。ダルガスはこの地で多数の強力な魔物を屠り、そのまま前線を押上げた」

過去を思い出すようにアルバートさんは続ける。

「最終的にダルガスの貢献によって魔物たちの撃退に成功。負傷者は出たものの、幸いにして死者は出なかった」

「その時までには、ダルガスは街を救ったヒーローだったんだね。今じゃ見る影もないけど」

この魔物の群れの襲撃を契機として、ベルオウンは都市内外を問わず「危険都市」という負のレッテルを貼られるに至ってしまった。

そもそも街のすぐ隣に《魔の大森林》が広がるという潜在的な脅威に晒されているし、その脅威が現実のものとなった魔物の襲撃は予期せぬ『災害』として位置付けられてしまったのだ。

死者が出なかったのは不幸中の幸いだ。

「街の復興が急務……というのは分かってはいたんだが、まず最初に街の外壁を修復しなくてはならなくてな。なんとか外壁の修復は完了したから、最近になってようやくこの地区の復興に乗り出せたんだ」

そう漏らすアルバートさんはどこか悔しげだった。

「本来ならもっと早く手をつけるべきだったんだが、外壁の修復費の工面やダルガスの蛮行による

問題などの対処に追われ、どうしてもこの地区の復興が後回しになってしまっていた。情けない話だよ、まったく」

「お父様……」

小さく顔を左右に振るアルバートさんに、オリビアが悲しそうな瞳を向けた。

アルバートさんは自分を責めるような口調で言っているけど、きつとアルバートさんもいっぱい頭を悩ませてきたんだろう。

すると、オリビアが名案閃いたと言わんばかりに「あつ！」と声を上げ、パンツと手を叩いた。

「それならいっそのこと、この復興地区で余っている土地をコロネさんに差し上げたら良いのではないですか!？」

「——ええっ!？」

一拍遅れて意味を理解し、反射的に声が出た。

オ、オリビア、急に何を言い出すの!？」

「ほら、コロネさんにはまだ『お札』ができていなかったじゃないですか！ お忘れですか？ 《魔の大森林》で魔物に襲われている私を助けてくださった、あの時のことを！」

「あ、ああ……オリビアと初めて出会った時だよね？ デリックとレイラも一緒にいた」
オリビアとの出会いはよく覚えている。

なんとたつてわたしが異世界に来て初めてエンカウントした第一村人だったから。

まさか有力貴族のご令嬢とは思わなかったけど。

オリビアは満面の笑みで頷き、ヒートアップしていく。

「そうですね！ その時に私が必ずコロナさんに『お礼』をすると約束したではないですか！ ですが『幻の果実』の一件が降りかかったり、コロナさんが王都に旅立たれたり、私が忙しくて遊びに行けなかったりと、色々と予期せぬことが重なってしまいました。その結果、わたしの『お礼』がうやむやになってしまっていたのです！」

「ま、まあそうかも？」

わたしも言われるまで忘れてた。

こうして言われても、そんなことあったような……？ くらいのおぼろ気な記憶でしかない。だってオリビアと出会ったのつてもう一ヶ月以上前のことだもん。

「それはつまり、コロナにもこの地区の復興を手助けしてもらおうということか……。なるほど、俺では思い付かなかったアイディアだ！」

「え、アルバートさんも乗り気なの!？」

「現実問題、このまま復興作業を行っていても実際にこの地区を活用できるまであと数年はかかるだろう。それなら、一部だけでも先にコロナに譲渡し、有効活用してもらった方が効率的かもしれない。どうせ数年は死んだ土地だしな」

「そうは言ってもなあ……」

前世は二十歳のペーペー女子大生でしかなかったわたしに、不動産知識などあるはずもない。土地をもらってもわたしに上手く使えるだろうか。

まずは家を建てるのか？ それとも不動産投資で不労所得を狙う？

はたまたワンチャンの埋蔵金に懸けて地面を掘りまくってみたり？

——うん、スマートに土地を活用できてるイメージが全く湧かんわ！

「どうですか、コロナさん？ 多分、お父様にお願ひしたらどこでも好きな土地を分けてもらえると思いますよ！」

「ああ。この地区であれば、基本的にはどこでも大丈夫だぞ」

「ううむう」

顎に手を添え、口をへの字にして考える。

土地をくれるっていうのは率直にありがたいと言えはありがたい。

復興地区とはいえ、タダで土地を譲ってくれるなんて破格の申し出だろう。王都ほどではないにしても、一応ベルオウンもそれなりに人口があつて活況もある。

その瞬間、わたしの脳内に電流が走る。

「……そうか！ 考え方を変えれば——！」

よく考えたらアリかもしれない！ わたしが『自分のため』に使う方法はいまいち使い道が思い付かなかつたけど、『他の人のため』ならあるいは——。

わたしは顔を上げ、三百六十度を見渡した。

「半壊した建物と山積みの瓦礫が目を引くけど、この辺りって思ったよりも広いよね。それにわたしにはサラがいるし——」